イリノイ大学への留学から考える、オンライン時代における「オフライン」留学の意義

海外交流

伊　藤　孝　治*

The Significance of Studying Abroad "Offline" in the Online Era, as Reflected in My Study Abroad Experiences at the University of Illinois

Key Words：Study abroad, Cross-cultural experience

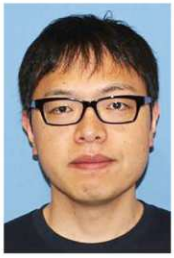
2020年から数年間にわたって世界中で猛威をふるった新型コロナウイルスはあらゆる常識を覆し、留学のあり方にも大きな影響を与えた。海外へ行くことがかつてほど容易ではなくなったコロナ禍の日本で広く実践されるようになったのがオンライン留学だった。オンライン留学の高まりはコロナ禍という「百年に一度」の一時的な例外的状況における現象だったと思われるかもしれないが、必ずしもそういうわけでもない。2024年11月現在、コロナ禍という言葉を見聞きすることもほとんどなくなったが、インターネットで「オンライン留学」と検索すれば非常に多くのウェブサイトがヒットする。一方で、実際に日本を出国して海外で生活しながら学習する従来の留学の重要性は依然として高い。21世紀のオンライン時代における「オフライン留学」の意義を私の経験を元に考えてみたい。私の留学経験はあくまでも一つの事例に過ぎず、オンライン留学の利点や意味を減じるものではまったくない。

イリノイ大学歴史学研究科への留学――先端的学びとロールモデルの先生との出会い

私は2014年8月にアメリカ中西部に位置するイリノイ大学の歴史学研究科に進学した。留学の最大の目的は勉学であり、知識の習得であるとされる。私はイリノイ大学で現代アメリカ史を専攻し、特にアメリカの過去を帝国の歴史として再構築する方法論について学んだ。留学前まで専門としていたアメリカ外交史の授業だけではなく、アメリカ先住民史や黒人奴隷史といった、日本の大学ではなかなか開講されない授業を受講できたことは学問的視野を広げる上でも大変有益だった。先住民や黒人奴隷といった周縁化されがちな行為者からアメリカ史を眺めた場合、その歴史はよく語られる白人中心のアメリカ史の物語とは大きく異なるからである。過去を眺めるレンズを上下逆転させることが大切であると気づかされたことは、留学を通じて得た最大の学術的学びの一つである。

イリノイ大学で有名な「アルママータ」（母校の意味）像と筆者。

異文化での人との出会いも留学の意義の一つに挙げられる。私の場合、将来的に目指したいと思えるロールモデルの先生にイリノイ大学で出会えたこと



* Koji ITO
1986年2月生まれ
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校
歴史学研究科（2021年）
現在、大阪大学大学院　人文学研究科
外国学専攻　講師　Ph.D.
専門／アメリカ史
TEL：072-730-5197
E-mail：k-ito.hmt@osaka-u.ac.jp

冬のイリノイ大学のキャンパス。イリノイ州の冬は寒く、最低気温は氷点下25度ぐらいにまで下がることもあった。

は幸運なことだった。私の指導教官はクリスティン・ホーガンソン（Kristin Hoganson）先生という、1990年代にアメリカ外交史に文化的アプローチを接合させたことで著名な方だった。私は常にホーガンソン先生に対して尊敬の念を抱いていたが、それは彼女のアメリカ史やその隣接領域に対する造詣の深さだけが理由だったわけではない。ホーガンソン先生は学生指導に熱心であり、私の研究が順調に進行しているか、行き詰まっているとすればどのようにすればよいのかをいつも親身になって考えてくださった。また、ホーガンソン先生は学生が私生活で何か困ったことがないかをよく気にされていた。私が特に忘れられないのはコロナ禍でのホーガンソン先生とのやり取りである。新型コロナウイルスの死者数が連日テレビや新聞で報道され、マスクや消毒液などの消耗品が不足し、国境を越える移動が厳しく制限されていた時に、ホーガンソン先生は私に必要なものはすべて足りているか、日本にいる私の家族や友人は元気にしているかを常に気にかけてくださった。コロナ禍で私は博士論文の完成を目指して執筆に勤しんでいたこともあり、学生を学術面だけではなく精神面でも支えることの大切さを理解し、実践されていたホーガンソン先生のメンターシップに私は大いに助けられた。

留学とは現地で生活すること――アメリカの主体的貢献の文化に触れる

先端的な知識の習得や人との出会いであれば、実際に現地に行かずとも、オンライン留学で達成できると思われるかもしれない。私が「オフライン留学」にこだわる理由は他にもあり、現地に身を置いて生活することでしか得られないものがあるからである。7年間に及ぶアメリカの大学院生活はつらく厳しいものだった。3年目に受ける博士論文執筆のための資格試験に備えて、体の不調を感じつつも朝から夕方まで大学図書館の書庫にこもり、1年間にわたって毎日ひたすら本と論文を読み続けた日々は特に記憶に残っている。つらく厳しいながらも無事に博士号を取得するまで努力できたのは、楽しい出来事も多くあったからである。

一番の思い出は毎学期の始めと終わりに開催される歴史学研究科のパーティだった。パーティの開催場所はたいてい研究科長の自宅であり、多くの先生が大学から車で10分～15分ほど離れた閑静な郊外に立つ大きな一軒家に住んでいた。私にとって驚きだったことは、そのパーティには歴史学研究科の教員や職員だけではなく大学院生も招待され、家族を連れてくることも歓迎されていたことである。日本の大学院在籍中に先生の自宅に行く機会などなかった私にとって、歴史学研究科のパーティは教員と学生の距離が日本の場合よりもはるかに近く、かつ両者の関係性がかなり水平的であるように感じた瞬間だった。また、大学構成員の大切な人は大学のイベントに歓迎されるべき存在として位置づけられていることを知り、アメリカの包摂的な環境ともてなしの文化を経験することができた。さらに私にとって

新鮮だったのは、歴史学研究科のパーティがポットラック・パーティというもので、参加者が各自で思い思いの食べ物や飲み物を持ち寄る形式だったことだ。パーティに招待された人たちはゲストという立場だが、彼らは何らかの食べ物か飲み物を持参し、その義務を果たすことを期待される。参加者は可能な範囲で貢献することを求められ、全員が自発的にその期待に応えようとするのである。主体的貢献が重視されるアメリカ社会の一端を覗き見ることができた。

ハロウィン（10月31日）の夜にアメリカ人の友人の家で初めてカボチャ彫りを体験。上手に彫れたとは言えないが、留学中の楽しかった思い出の一つである。

留学とはマイノリティになること――アメリカで「有色人種」として生きる

日本を出国して留学先の国で生活しなくても異文化経験はできると考える人がいるかもしれない。確かにそうかもしれない。しかし、さらにオフライン留学の意義を挙げるとすれば、留学先の異国でマイノリティとして実際に生活するということである。日本人の両親を持ち、日本国民として日本に生まれ、日本語を母語とし、日本の地で育った私は、間違いなく日本においてはマジョリティの側に所属していた。それがアメリカで生活するとなると、私は有色人種の外国人に分類されることになり、マイノリティの側に属することになった。マイノリティとして生活するということはマジョリティの側にいた時には経験しなかったことを経験し、感じなかったことを感じるようになるということである。

留学3年目の2016年4月にイリノイ大学で人種主義に関連する事件が起こった。大学の建物内にあるテーブルの上に輪縄（絞首刑用の吊り縄）が置かれていたのである。輪縄はかつてアメリカ南部で白人至上主義者たちがアフリカ系アメリカ人をリンチして処刑する際に用いた道具であり、アメリカにおいては有色人種に対する憎悪や人種主義的暴力の象徴だった。この事件の他にも、ヒスパニック系の学生を貶める落書きやナチス・ドイツの鉤十字のマークが大学の施設内で発見されていた。これらの一連の事件が示していたのは、2016年のドナルド・トランプの大統領当選に見られるように、アメリカにおける白人至上主義的風潮の高まりであり、大学のキャンパスのような比較的リベラルとされる場所も必ずしも安全とは言えなかった。有色人種と見なされる私自身が政治的暴力の被害者になるかもしれないという、日本では考えても見なかった可能性に直面し、キャンパスやその周辺を歩く際にも恐怖や緊張といった感情を抱くようになったことを今でも覚えている。幸い留学中に危険な目に遭うことはなかったが、私はマイノリティとして社会の中で生きるということがどのようなものであるのかを自分なりに経験することができた。この時の経験から、私は日常生活においてもアメリカ帝国史の研究においてもマイノリティの立場に立って物事を考えることの大切さに気付かされ、日本に帰国した今でもこの教訓を意識的に実践するようにしている。

留学のすゝめ

このコラムでは私の「オフライン留学」の経験と私がそこから得たものについて紹介してきた。紙面の都合上、イリノイ大学への7年間の留学で思い出に残っている出来事をすべてお話できないのは残念である。最初にも断ったが、このコラムで取り上げた私の留学経験は一つの事例に過ぎない。私はアメリカへ長期留学するだけの幸運に恵まれ、そこか

ら多くの財産を得たことから、「オフライン留学」の意味について私なりの見解を記述した。留学の形態は様々であるが、それぞれの形式の留学に長所や利点があり、どのタイプの留学が最も有益であるのかは個人の目的や利用できる資金・時間といった要因に左右される。それでも一つ言える確かなことは、留学は一生のうちに一度はするだけの価値のある行為であるということである。留学を通してしか得られないものがきっと何か見つかるはずである。

マナヅル